

「日本人の底力」…音楽の視点から

(株) コモド代表 音楽プロデューサー 友部 主彦

先日R.シュトラウスの「アルプス交響曲一通称アルペン」を聞く機会があった。この曲は「ヨーロッパアルプス」の夜明けから日没までを「登山者の視点」で描いた壮大な交響詩である。のどかな山麓・険しい山容・瞬時に劇変する気候をホルン・トランペット等の金管楽器やオルガンを駆使し、大編成・大音量でダイナミックに表現した名曲である。

一方「日本アルプス」だって、雄大な眺めや自然の厳しさにおいてヨーロッパのそれにひけをとらない。「剣・立山」「槍・穂」「北岳・南ア」…とりわけ「日本アルプスの雄-剣」だ。その「剣」に初登頂するのである。音楽は第一人者の池辺先生！ 前人未踏の頂に立つ瞬間に鳴り響くであろう音楽に期待が膨らむ。富士山頂ならのびやかに響くトランペットが、ユングフラウなら爽やかにこだまするホルンがいい。「剣」は？

仙台フィルの演奏は情感を込め常にテヌートでゆったりと流れる。画面に合わせて原曲を切り張りしテンポを変え、柴崎夫婦の会話ではバイオリンソロをチェロに替え、肉声の音域に下げること夫婦の温かさやぬくもりを伝える。吹雪のシーンで淡々と流れるマルチェルロは

かつて使われた恋愛映画のイメージではない。アレンジは極めて丁寧であり原曲に忠実でさりげない。池辺先生にとってはご自分でオリジナルを作曲した方がはるかに効率的だった事であろう。

私は3度「剣」に登った。1度目は「剣」が3000m峰だった時代…剣御前から見た真っ黒い威容に足がすくんだ。でかい。夢中で岩壁にしがみついた。頂上からの眺めの記憶はない。足の震えが止まるのを待ってすぐ下山した。生涯最長のトレッキングは笠岳を起点に薬師・鷲・立山を経て樺平に至るルート。仙人池から見たハツ峰の雄姿になぜか涙したことが懐かしい。私にとって「剣」はそんな山なのである。

「初登頂」で流れた音楽は…荘厳なバッハ。もし「日本山岳会」が主人公の作品だったなら「アルペン」もあり得たかもしれないが…。力強いチューバに支えられ本篇で初めて響く金管群。しかしそこに華やかさはない。栄誉や見返りを求めずただ淡々と、黙々と、コツコツと、丁寧に…かつての日本人の底力の源はこんな姿にあったのではないか…全編を貫く音楽のポリシーを通して改めて考えさせられた。

映画「剣岳 点の記」

日本大学文学部 地球システム科学科 4年 松下まなみ

私は映画「剣岳 点の記」から、測量という仕事にかかる情熱を感じるとともに、測量の大切さを改めて考えさせられた。

私は、測量が地図を作る上での基となり、国を管理し守るために欠かせない仕事であると考えている。測量官柴崎芳太郎は国のために、まだ誰も登ったことのない「剣岳」を測量することとなる。しかし、ただ頂上を登るだけではない。剣岳の正確な地図を作るためには、「計画・事前調査・選点・三角点の設置・観測・まとめ」という長い道のりがある。よって剣岳周辺に約27か所の三角点を設置しなくてはならない。

国の重要な任務にもかかわらず、しかしその仕事はなかなか他の人には理解されないことがある。測量とは一体何をやるのだろうか。例えば、初登頂はできるのかと柴崎に質問する新聞記者、山を登るだけではないと驚く村の人、初登頂を目指す日本山岳会の人々…。しかし、たくさんの人と接することで、その測量の大切さを周りの人が知っていくこともある。(全員がそれを理解するわけではないが)日本山岳会小島の「我々は登るのが目的だが、あなたがたは登ってからが仕事だ」という言葉が、測量の意味をよく表現していて、心に残っている。

この映画は、一般にはわかりにくい「測量」という仕事を、「映像」を見ることで、その迫力や大変さを実感させら

れるものとなっている。原作とはまた違った魅力には、映画では目の前に険しい剣岳が現れることにある。

紅葉した美しい剣岳や、吹雪に見舞われた剣岳、そのダイナミックな迫力が映画にはある。原作でのイメージを読み取って映像化するという事は簡単なことではない。この見ごたえは、実際に剣岳を登って、撮影したことにあると改めて感じた。特に印象に残ったシーンは、主人公たちが行者様の言葉を思い出し、試行錯誤して、剣岳の登頂口(現在の長次郎谷)を見つけ、危険を分かっているながらも、雪山を登るところである。その剣岳の険しさが恐ろしく映し出され、背景の音楽(ヴィヴァルディの「冬」)がさらに登る辛さを表現していた。

世の中にはたくさんの仕事があり、仕事に対するそれぞれの想いがある。私がこの映画を見て感じたことは、人がその仕事をどう評価しようとも、自分がその仕事にどれだけ重みを感じ、どのくらい打ち込んできたかが大切であることだ。私はまだ学生で、生涯の仕事に携わるのはもう少し先の話だが、今、学生生活での勉強や研究や数々の役割の中で、剣岳の地図を作成した測量隊たちのように、自分の信じたことを最後までやり遂げる人でありたいと感じ、それが将来誇りを持てる仕事をするための「道」だと考えた。

「劔岳 点の記」を鑑賞して

金沢工業大学 環境・建築学部 環境土木工学科1年 寺田 哲也

今回、「劔岳 点の記」を鑑賞して木村大作監督が作られたこの映画の迫力に感動したとともに、測量について深く考える良いきっかけになった。私は以前、「劔岳 点の記」の映画化が発表される前に、原作を読んだことがある。その際は、私が富山県出身で劔岳が身近な山だったこともあり、興味を持って読むことができた。『劔岳 点の記』を読むまでは、身近に感じていた劔岳がどのような山なのかも知らなかったし、当時の測量技術や測量の過酷さなどは考えたことも無かった。現在、そしてこれから測量について勉強していくという点において「劔岳 点の記」のような素晴らしい作品に出会えたことは良い刺激になった。

そしてこの素晴らしい作品を映像として見られたことは本当に嬉しかった。映像で見るとより劔岳を測量するということの過酷さを感じる事ができた。また、私は柴崎芳太郎が陸地測量部から劔岳に三角点を設置するよう命じられ、難しいと言われながらも成功させたことは無論素晴らしいことだと思うが、それを支えた周りの人々

も素晴らしいと思う。劔岳に三角点を設置することは絶対に柴崎一人ではできなかっただろう。測量をサポートする生田信をはじめ、測量隊を登頂に導いた宇治長次郎らがいたからこそその結果だ。そのことをよく理解している柴崎が、登頂の際に宇治が柴崎に最初に登頂するよう勧めたが、柴崎がその勧めを拒否し、宇治を先頭に登頂させたシーンにはとても感動した。最後に、「劔岳 点の記」を鑑賞して、これから私が何を考え何をしていくべきかを考えてみた。昔の測量技術と現在の測量技術は違うので柴崎と同じことをしようとは思わない。しかし柴崎が地図を完成させ、人々の役に立ったように私も現在の進歩した測量技術を生かして人々の役に立ちたいと考えている。そのためにしなければならないことは大学で専門知識や専門技術を身につけることだろう。社会に出て通用するような知識や技術を勉強して、いずれは柴崎のように大きな事をしたい。このように、今一度測量について考えさせてくれた「劔岳 点の記」を鑑賞できたことは、良い経験になったと思う。

映画「劔岳 点の記」に関する感想

金沢工業大学 環境・建築学部 環境土木工学科1年 堀 達也

「劔岳 点の記」は当時、登頂されていないと言われていた劔岳の測量を行うという映画である。この映画で感じたのは、当時からの測量技術の発達と未踏の地に踏み込む測量隊の強い精神力である。そのことについて、深く考えていく。

科学技術は日々発展し続けている。そして、その成長は急速だと言える。測量技術もそう言えるだろう。私たち土木技術者を目指す者としてその進化についていかなければならない。しかし、基礎を忘れてはいけない。だから、この映画が基礎は大切だという良い刺激になった。私が本学に入学してから1年が経とうとしているが、授業の中で丸暗記していることが数多くある。丸暗記は内容を理解せず、公式をただ覚えるだけで自分のためにはならない。「劔岳 点の記」を見たように、その分野の歴史を知ることができれば良い。それができなくとも、自分で調べ、先生に聞くなどして基本に戻ることが大切である。

測量隊が劔岳に登頂した時、すでに誰かが登頂していた。しかし、その道が記されていたわけでもなく、地図が

あったわけでもない。測量隊の力で登ったと言える。その精神力は人並外れたものがある。途中で諦めない、絶対に成し遂げるという強い気持ちを感じられた。私もその熱い気持ちを忘れてはいけないと感じた。今、私が前人未到を成し遂げることは無理だろう。しかし、困難に立ち向かい、諦めずやり通す気持ちは持つことができる。今はそれが人から見ればどんなに小さなことでも構わない。今のうち積み重ねていけば、いつか周りに認めてもらえる時が来るだろう。

この「劔岳 点の記」を通して、自らを成長させる良いきっかけを与えてもらった。測量学の参考と言うだけでなく、人間の生き方についても自分のためになった。映画では、劔岳という大きな山が柴崎芳太郎の前に立ちだかった。その山は目に見え大きなものだと分かっていたが、人生に立ちだかる山は、目に見えるものとは限らない。この映画で人生における困難という山の乗り越え方を学ぶことができた。